

## 特集 日本エンドオブライフケア学会第5回学術集会

### 仏教の死生観と看取り

龍谷大学文学部 鍋島直樹

#### 死の字義

死とは何か。「死」という漢字の由来をひもとくと、死の真意が見えてくる。白川静は、「歹は死者の残骨の象。人はその残骨を拝するひとであるらしく、死を弔う意である。」<sup>1</sup>と明かしている。このように死は亡くなった本人単独では成立しない。死はその人の死を悲しみ、手を合わす人がいてはじめて死となる。死とは悲しみと愛があふれることである。

実際の事例として、ある方の遺骨への想いを本人と家族に承諾を得て紹介したい。

Nさんは祖父の葬儀後、会館出口で僧侶の私を待っていた。私は歩み寄って、「どうもありがとうございました…。あの、どうかなさいましたか」と声をかけた。Nさんは私にそっとハンカチを見せた。「それは…」と尋ねた。Nさんは「おじいさんの遺骨を拾ったんです」とだけ答えた。骨壺に納めた遺骨とは別に、Nさんは祖父の遺骨を拾い、自分の花柄のハンカチに包んで持っていた。「どうしたらいいですか」と相談してくれた。私はNさんが骨壺に入りきれない祖父のお骨を拾ったと想像し、「優しい。おじいちゃんも喜ばれると思います」と伝えた。二人で相談して、後日、納骨堂に納めた。やがて法事の時、Nさんの母親が、「孫が祖父の足の爪をきれいに切っていたんですよ」と教えてくれた。私は改めてNさんの祖父を亡くした悲しみに気づき、感動した。Nさんの拾った遺骨は祖父の足指の遺骨だとわかったからである。私はNさんに向かい、何も言わずうんうんと頷いた。一周忌法要の時、私はNさんに承諾を得て、Nさんが祖父の足指の遺骨を拾ってハンカチに包んでいたことを法話で家族に紹介した。再び涙があふれた。家族も泣いてくださった。有りあうすばらしい家族であることを讃えた。Nさんの祖父の死を悲しむ気持ちはせつなく限りなく尊い。遺骨はその方が確かにそこに存在し、その方と心を通わした愛情の証だとNさんに教えられた。

#### 釈尊の看病

釈尊の看病に関する記録がある。ある修行僧が病気になる、身寄りがなく、大小便の中に埋もれて横になっていた。釈尊は、その修行僧のからだをきれいに洗ってあげた<sup>2</sup>。釈尊は病気の弟子を看病しながら、看病の意義を次のように説いている。

仏、諸比丘に告げたまはく、「汝ら出家せし所以は、共に同一の水乳なり。……

それ病を瞻るは、我を瞻ると異なることなし。（『大正大蔵経』2巻767b）

ここで釈尊は、仏道を歩む者は、同じ師のもとに集う仲間であるから、互いに看病しあおうと呼びかけ、仲間の病気を看取ることが、そのまま自分自身を見つめることになると教えている。

#### 仏教の看取りと救い

日本において仏教に基づき死の看取りを確立したのは、平安時代の源信である。源信は『往生要集』に、中国浄土教における臨終行儀の実践方法と念仏の意義を示した。そこに臨終の看病方法が次のように明かされている。

祇園精舎の西北、日の沈むところに、「無常院」という病人を世話する施設があった。病人は、金箔の阿弥陀仏像を安置した無常院の建物に連れてこられる。その名は、世俗を離れた静かな場で人生をふりかえり、無常をこえた極楽に往生することにちなんでいる。病人は、阿弥陀仏の手につながれた五色の幡の一方をもち、仏の来迎を期して、共に極楽へ往生しようと思った。看取る者は、香を焚き、散花して部屋を清らかにした。病人が大小便・嘔吐・唾などを催した時は、その都度、それを取り除き、苦痛を和らげる。病人に学び、そのあるがままの告白を過去帳に記録し、残された人々の心の灯にした。地獄のような苦しみで苛まれた時は、仲間が集い、そばで看病し、一緒に念仏を称えた。決して見捨てることのない仏の救いがあることを病人に伝え、不安を鎮静化した。仲間は亡き後、心温まる葬儀をもよおし、墓地に納骨して、末長く大切に追悼された。

注目すべきことは、仏教徒は、病人に対して、「仏子」、すなわち、「仏の子よ」と呼びかけて、病人に学び、病人を敬愛する気持ちで接していることである。どのような病人も、限りある命を自覚しながら、阿弥陀仏の救いの光にいだかれて、限りなきいのちをたまわって生かされていることを、この「仏子」という尊称が示しているだろう。

こうした仏と仲間に見守られた看取りは、幼くして父を亡くした源信が聖僧になるようにと応援しつづけた母の愛情から生まれた。源信が母を心配して比叡山を降りた時、母は重病だった。母は息子に会えて喜び、源信は念仏を称える力のなかった母のそばにいて、法話を聞かせて、念仏を勧めた。母は感謝して念仏を称え、静かに亡くなったとされる。源信にとって親子で導きあった看取りの経験が、仏教の看取りと救いを説く原点となっていたことだろう。

源信はみずから「予がごとき頑魯のもの」（私のようなかたくなで愚か者）と自覚し、末世の煩惱具足の凡夫のために往生極楽の道があると明かした。「極重悪人の私がただ念仏する時、摂取して見捨てない仏の光の中にある。病気で思うようにならずとも、阿弥陀如来は常に私を照らし護っている」と源信は実感していた。この源信の「大悲無倦常照我身」の弥陀の救いは、親鸞に受け継がれる。

法然は臨終行儀を尊重しつつも、その形式にとらわれず、日頃からただ念仏を申すことによって、臨終に必ず阿弥陀仏の来迎があり、浄土往生できることを明かした。

先徳たちのおしへにも、臨終の時に、阿弥陀仏を西のかべに安置しまいらせて、病者を西向きにふして、善知識に念仏をすすめられよとこそ候へ。それこそあらまほしきことにて候へ。ただし死の縁は、かねておもふにもかなひ候はず、にはかにおほぢ・みちにおはる事も候。また大小便利のところにて死ぬる人も候。前業のがれがたくて、たち・かたなにていのちをうしなひ、火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼすたぐひおほく候へば、さようにしに候とも、日ごろの念仏申て極楽へまいる心だにも候ひとならば、いきのたえん時に、阿弥陀・観音・勢至、きたりむかへ給べしと信じおぼしめすべきにて候也。（『往生浄土用心』）

ここで法然は、「善導や源信などの先徳たちの教えにあるように、人が臨終を迎えるときに、阿弥陀仏を西の壁に安置し、病人は顔を西向きに寝させて、病人のそばにはよき先生に念仏をすすめてもらうのがよいだろう。しかし、死の縁は無量である。

自分の予想しているように死を迎えるとは限らない。突然、大きな道や裏路地で命を終えるときもある。また便所で亡くなる人もある。前に為した行為がもとで、太刀や刀によって切られて命を失ったり、火に焼けたり、水におぼれて、命をなくす人もいる。しかしどのような死を迎えるとも、日頃より念仏をもうして、浄土を願う心さえあれば、息の絶えようとするときに、阿弥陀仏、観音菩薩、勢至菩薩が必ず迎えにくるとどうか信じてください」と教えている。このように法然は、人間のさまざまな死の現実を知り、いかなる死を迎えるとも、日頃から念仏する人々は、必ず仏の来迎があると明かした。

親鸞は、中世当時、飢饉で苦しんで亡くなった同朋を哀れに思いつつ、こう記した。

まづ善信（親鸞）が身には、臨終の善悪をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴無智のひとも、おはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとにまふされ候ひける、すこしもたがはず候なり。（『末灯鈔』6通、親鸞88歳）

親鸞は、乗信房に「あなたが人々におっしゃった、すべては阿弥陀仏のはたらきによって浄土に往生するということは、少しもまちがいはありません。長年、私が皆様に来てきたことと異なりはありませんよ」と伝えた<sup>3</sup>。平生において、阿弥陀仏の本願を信じ念仏するところ、必ず往生すべき身と定まっているから、臨終の迎え方の善し悪しを問題にする必要はない、愚かな者も極楽に往生できると親鸞は示した。どれほど悲哀に満ちた死も、尊い極楽往生である。なぜなら、如来の本願力によって、浄土に往生するからである。そう親鸞は明かした。

浄土とは、「無量光明土」（『教行信証』）、限りなき光の世界と表現される。浄土の蓮華から限らない光があふれて、世界のどこまでも光が届いていく。仏たちは光をあらゆる方向に放って、迷える人々を真実に導いてくれると親鸞は明かした。極楽は、差別から心を解放し、永遠であり、すべての存在を平等に慈しみいだく世界である。重要なことは、浄土は大切な人と必ず会える世界であるということである。親鸞が門弟に送った次の手紙がある。

この身は、いまは、としきはまりてさふらへば、さだめてさきだちて往生しさふらはんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせさふらふべし。（『末灯鈔』12通）

浄土は、死を前にした人間の孤独さを和らげ、死別の悲しみを超えた心のつながりを育む。浄土に往けば、仏となって、遺族の心に還ってきて、家族縁者を導いてくれる。

#### 臨床宗教師養成の誕生

ホスピスに学び、仏教の伝統を活かして、日本で臨床宗教師の養成教育が誕生した。

世界医師会（World Medical Association）は、1981年に『患者の権利に関するリスボン宣言』を採択し、原則11条「宗教的支援に対する権利」に、「患者は、信仰する宗教の聖職者による支援を含む、精神的、道徳的慰問を受けるか受けないかを定める権利を有する」としている<sup>4</sup>。

「臨床宗教師（interfaith chaplain）」という言葉は、欧米の聖職者チャプレンに相応す

る日本語として、岡部健医師が2012年に提唱した。「臨床宗教師」は、宗教勧誘や営利を目的とせず、相手の価値観、信仰を尊重しながら、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添い、生きる力を育む宗教者である。臨床宗教師は、医療福祉機関等の専門職とチームを組み、宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえのない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行う。2012年、東北大学大学院実践宗教学寄付講座として臨床宗教師研修が創設され、龍谷大学、上智大学、大正大学、武蔵野大学、愛知学院大学、種智院大学などにおいても、臨床宗教師養成教育を開設した。

寄り添う「スピリチュアルケア」とは何か。スピリチュアルペインとは、老病死の苦しみに直面して、自分が自分でなくなり、自己の支えが揺らぎ、崩壊して生きる道が見出せない苦しみである。「なぜ私がこんな目に遭わなければならないのか」「私の人生は何だったのか」「死ぬのが怖い」と思い悩み、救いを求める気持ちである。

スピリチュアルケアは、その人の支えとなるものとのつながりを再確認することを通して、対象者の心の安定、回復、成長を見守ること、またはセルフケアである<sup>5</sup>。寄り添うとは、特別な技術や個人の能力を役立てて、相手の心を聞き支えるのではない。言うに言えない人々の悩みに向き合い、その場にいること（presence）である。相手の感情に焦点を当てて、肚を据えて聞こうとすることである。

伝わる「宗教的ケア」とは何か。宗教的ケアとは、相手が宗教的ケアを求めていることを確認したうえで、相手の信仰を尊重して傾聴する。宗教的ケアとは、神や仏の大いなるものの慈しみにいだかれて相手の苦悩を聞き、闇に光がさすとぬくもりを感じるように、罪や悲しみをそのままいただく教えを伝えることである。

このように宗教は本来、愛と慈しみを育み、心の平安と世界の安穏を願う。

#### 患者の願い

患者は、生涯の愛を確かめ合う会話や時間を求めている。患者が医療に求めることは、適切な診断による予防と治療、手厚い看護である。そのうえで終末期患者の願いは次のような点があげられる。第一に、自分の孤独さを理解してくれる人がいることである。ケアの源泉に、「何かをすることではなくそばにいることである。"Not doing, but being."」という言葉がある。絶望的な状況に置かれている人に何もできなくても、看取る者が話をするのを聞き、話ができなくてもそこにただただ支えになる。第二に、未解決な問題を解決できるように努力することである。第三に、穏やかな日常生活の存続である。患者は、身体的苦痛が和らぎ、これまで過ごしてきた日常を家族や良き理解者と大切に過ごしたいと願う。第四に、患者の願いや愛情を看取る人に受けとめられることである。第五に、生死を超えた彼岸への誕生、愛する人々との再会の希望である。古来より浄土教では、死は終わりではなく、死別しても愛する人と極楽浄土で会えると教え、亡き人は仏となって残された人々の人生を導いてくれると説いている。死を超えたつながりを感じられることは、終末期の患者と看取る家族や医療福祉スタッフとの心を温めることなる<sup>6</sup>。

傾聴は「愛の継承」である。なぜなら、寄り添う人が相手から大切なことを教えられるからである。人々の悲しみは深い。それでもその人の悲しみは愛情の裏返しでも

ある。傾聴する者の心はその人から夢や愛情をいただいて宝石箱のようになる。

患者は、医療スタッフや家族に心配をかけたくなくて遠慮している。そのような時、僧侶は、評価せずに聞いてくれる存在である。病院や家庭で最も弱い立場は病人である。にもかかわらず私自身、病気の母に対してきつい言葉を言ってしまったことを反省する。だから、できれば私は弱い存在でありたい。

死に直面する時、人は自己の人生の意味をふりかえり、真の優しさと愛情に気づく。患者とは、家族やよき理解者にめぐりあい、愛されていると実感できた時、寂しさが和らげられ、安らぎを感じることが出来る人たちである。

人は亡くなると、その姿形は見えなくなり、何もなくなってしまふ。しかし、その人から受けた愛情、その人にささげた愛情を忘れないことができるのは、今ここに生きている自分自身だけであろう。愛する人を失くして流した涙を、幸せの種に注ぐことができれば、いつかきっと新しい幸せの花を咲かせることができるにちがいない。

---

<sup>1</sup> 白川静『新訂 字統』377頁、平凡社。諸橋轍次『大漢和辞典』

<sup>2</sup> 中村元「ビハラー活動の源流について」5頁、『ビハラー活動—仏教と医療と福祉のチームワーク—』所収、本願寺出版社

<sup>3</sup> 『親鸞聖人御消息 恵信尼消息（現代語版）』61頁、本願寺出版社

<sup>4</sup> 日本医師会訳『患者の権利に関する WMA リスボン宣言』、日本医師会([med.or.jp](http://med.or.jp))ホームページ

<sup>5</sup> 谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考える—スピリチュアルケアと宗教的ケア」、『緩和ケア』19の1、28～30頁、2009年

<sup>6</sup> 鍋島直樹「終末期患者の医療についての宗教家の役割」『日本医師会雑誌』148巻1号、66頁、2019年